

[論文]

## コーネル・ウエストのレイシズム論

大 宮 有 博

名古屋学院大学商学部

### 要 旨

本論の目的は、コーネル・ウエストがレイシズムについてこれまで論じてきた内容を総括することである。本研究により明らかにするウエストのレイシズム論の要諦は、白人優越主義の萌芽に黒人に対する経済的搾取の意図はなかったということ、また被差別者が背負わされた「ニヒリズム」に向き合うことこそ、レイシズムの解決にあたって不可欠だということである。

キーワード：コーネル・ウエスト，人種差別

## Cornel West on Racism

Tomohiro OMIYA

Faculty of Commerce  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2015年7月31日

## はじめに

筆者は『キリスト教平和学事典』(2009)において、アルベール・メンミの説に依拠しながら「レイシズム」を以下のように定義した<sup>1)</sup>。

私たちはある集団と集団の間に差異を作り出し、その際に価値づけを行い、その差異を歴史的・一般化・全体化を行うことがある。この集団の間での差異は、生物学的なものであることもあり、文化的なものであることもある。生物学的な差異(例えば肌の色による違い)を、一方を他方よりも優れているとする非科学的な主張…中略…をレイシストは行う。この差異の価値づけは、ある集団に対する攻撃と、自分がその攻撃から利益を得ることを正当化するという目的を持っている(大宮2009:388)。

このような多少古典的な定義を掲載してから5年が経った今、レイシズムに関する状況は大きく変化している。例えば在日コリアンに対するヘイトスピーチや、スポーツのサポーターによるレイシズム行為は、現代社会に何らかの不满を持っている社会層において、レイシズムが水面下で広がっていることを表す「氷山の一角」である。またアメリカでは経済格差が拡大する中で、アフリカンアメリカンの多くが貧困に喘いでいる<sup>2)</sup>。そうした状況の中で、ミズーリ州フォークソンで白人警察官がアフリカンアメリカンの少年を射殺したことをきっかけに起きた抗議活動は全米に広がった。こうした現状を踏まえて、レイシズムに立ち向かうための理論は更新の必要に迫られている。これが本論の研究動機である。

本論ではコーネル・ウエストのレイシズム論を総括することにより、レイシズムとは何かを改めて考察する。ウエストは主に80年代にレイシズムに関する論考を公表している。これだけにとどまらず現在も、貧困やレイシズムに対する抗議活動に積極的に参加し、「預言的発言」を行っている。

まず本論1節では、ウエストによる白人優越主義の創発に関する説を検討する。2節では保守派、リベラル派、リベラル左派のレイシズム論に対してウエストが展開した批判を検討する。続いて3節では、ウエストによるマルクス主義のレイシズム論批判を検討する。最後に4節で、ウエスト自身のレイシズム論について検討する。「ネオマルクス主義者」にして解放の神学者である彼は、マルクス主義の徹底的な批判の上に、自らのレイシズム論を構築している。

## 1. 近代レイシズムの系譜

ウエストは*Prophetic Deliverance!* (1982) の2章において、白人優越主義が近代、とりわけ啓蒙主

1) メンミの日本語訳の補遺を参照した(Memmi 1994: 11 = 1998: 161-2)。

2) オキュパイ・ウォールストリート運動の最中2012年に、トラヴィス・スマイリーとともに出版された*The Rich and the Rest of Us*では、より多くのアフリカンアメリカンやヒスパニックが貧困に陥っていることを明らかにしている。

義の時代（1688-1789）にどのように創発したかを系譜学的に考察している。彼によれば近代的レイシズムは白人優越主義の創発とともに誕生し、その白人優越主義は近代言説の構造と科学的研究との創発的融合から生まれたものである（PD：53）<sup>3)</sup>。

この近代言説の構造は、科学革命・デカルトによる哲学の変革・古典復古という3つの歴史的契機により形成された（PD：50）。科学革命とは、学术界における科学の権威の確立を意味する。ベーコンは経験主義を基盤として、実験と観察により自然の法則を明らかにする帰納法を提唱し、デカルトは合理主義を背景として、仮説から特定の結論を導き出す演繹法を提唱した。この帰納法と演繹法は、観察と証明とを科学的方法の核心に据え、新たな認識のパラダイムを提供した。そして科学の権威はさらに確固たるものとなった（PD：52）。

また古典復古では、美や調和に関する古典古代の理想が近代言説に浸透している。この近代における古典復古は、「規範的まなざし」（normative gaze）と呼ばれるものを生み出した（PD：53）。この「規範的まなざし」とは、観察者が観察したものを整理し、比較する際に用いる言わば「理想の姿」のことである。観察者はこの「理想の姿」を基準に据えて、人間の標準化と差異化を行う。

18世紀の「美術史の創始者」、ヨハン・ヴィンケルマンの *Geschichte der Kunst des Alterthums*（1764年）<sup>4)</sup> は、この「規範的まなざし」を示す良い例である。彼は古代ギリシアを「美しい肉体の世界」「正しい美」と呼び、美の理想あるいは基準を提供していると考えた（PD：54）<sup>5)</sup>。この理想に則り彼は、ヨーロッパ人の外見こそが理想の美に近いと考えた。

ウエストは白人優越主義の創発として、概ね次のような説明をしている。啓蒙主義の時代、まず博物学が人類をいくつかの人種に分類した。次に骨相学（Phrenology）や観相術（Physiognomy）が、人種別に外見の優劣に格付けをした。この外見の優劣の格付けは、人種の間能力の差があるという白人優越主義と容易に結びついた。

18世紀の博物学者たちは、人類を大まかに4つの人種に分類した。「人種」（race）という言葉を最初に用いたのは、フランス人旅行者にして医師のフランシス・ベルニエである<sup>6)</sup>。また人間を人種に分類するという考え方は、「分類学の父」カール・フォン・リンネの著した *Systema Naturae*（1735）<sup>7)</sup> に見られる。ここに1つの普遍的な人類（ホモ・サピエンス）を、多様な亜種に「科学的に」分類する考え方が生まれた（PD：55-56）。

3) 近代言説とは、妥当な推論を立て、机上の仮説に裏付けをし、確かな結論を導き出す。そして、それは真実についての表象を検証するにあたって、観察、比較、序列、計測に携わる理想的かつ自由な主体によって支配される真理と認識についての理解に依拠している。

4) 日本語訳は『古代美術史』（中山典夫訳、中央公論美術出版：2001年）。

5) ヴィンケルマンのこのような見方については、今橋2014を参照。

6) ベルニエ (François Bernier) は旅行者の知識を収集・整理し、ヨーロッパ人(インドまで含む)、アフリカの黒人、東南アジアのオリエンタル人、ラップ人の4つの人種に分類した。

7) 『自然の体系』 (*Systema Naturae*) はあらゆる動植物の分類し体系化したものである。ウエストは言及していないが、人類の位置づけ、人種の分類は『自然の体系』1版(1735)から10版(1757年)の間に大きな変化が見られる(岡崎, 2006)。

博物学者に人種間に優劣をつける意図はなかった。ところが分類はただちに階層化に帰結する (Balibar 1991=1995: 83-84)。すなわち分類された人種のうちで、どの人種が美しいかを古代ギリシアの芸術作品に依拠しながら考察する動きが出てきた。ドイツの医師ヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハは、人類を5つの人種 (コーカサス人, モンゴル人, エチオピア人, アメリカ人, マレー人) に分類し、古代ギリシアの芸術作品, とりわけ彫刻に見られる人体のプロポーションや, 左右対称の釣合いの取れた顔立ちを, 最も美しい人間の模範と考えた。さらに彼は, 「最も美しい人々の暮らす」コーカサスを起源とする白人種 (=ヨーロッパ人) を最も美しいとし, エチオピア人 (=黒人) はヨーロッパの美から程遠い存在であるとした (PD: 57)<sup>8)</sup>。彼の研究には, 人種の間にも優劣をつける意図はなかった。しかし白人が最も美しい外見を持つという彼の主張が, 自民族中心的な見方を脱しておらず, 容易に白人優越主義につながっていくことは言うまでもない。

続いて骨相学を提唱したペトルス・カスパーが, 古代ギリシアの芸術作品の「フェイシャルアングル」(facial angle, 頭部を側面から見た際の上顎と下顎の幾何学的骨格位置関係)<sup>9)</sup>を, 観相術を提唱したヨハン・カスパー・ラファテルがギリシア的美を基準として, 人種を外見により格付けした。例えばカスパーは, 古代ギリシアの彫刻のフェイシャルアングルを100とすると, ヨーロッパ人は97なのに対して黒人は60~70で, より猿に近いと主張した (PD: 58)。

17世紀後半から18世紀にかけてヨーロッパで芽生えた白人優越主義の創発の最終段階に登場するのが, フランツ・ガルによる骨相学である。彼は人間の知能が, 頭蓋骨の形状により決まるとした (PD: 59)。それまでは外見の美しさによる優劣だったものが, 人間の知性の優劣に結びつけられた。このように白人優越主義は, 啓蒙主義時代のヨーロッパにおいて, 近代言説と古典復古を土壌として芽生えたのである。

骨相学も観相術も, 今日では疑似科学と見なされ科学としての権威を持たない。しかし近代においては, 骨相学や観相術は権威ある科学とされていた。そのためそれらから生み出された白人優越主義は, ヨーロッパ・アメリカの啓蒙主義時代の知識人の間に深く浸透していった。例えばこの時代, アメリカの知の頂点に立っていたサミュエル・スミスは, 人類は1つの種であり, その中に変種 (varieties) が存在し, この変種は気候, 社会状態, 生活習慣の3つの要因から生まれたものであるとし, これらの変種のうち, 高度に文明化された白人こそが理想的であると主張している (PD: 60)。また奴隷廃止論者の間にも白人優越主義は浸透していた。奴隷廃止論者でもある医師ベンジャミン・ラッシュは, 黒人の黒い肌は遺伝子的な病気であると信じ, 白人は黒人と結婚すべきではないと主張した (PD: 60-1)。

ウエストは上述のように白人優越主義の創発の過程を明らかにしている。ここに述べられた白人優越主義の創発に関する議論は, 現在ではレイシズムに関する一般的な理解となっており, 目新しいも

8) ブルーメンバッハの「人種」については, 弓削2012を参照。

9) フェイシャルアングルについて説明は, 吉田2001: 252参照。一般的にカンパーは「人種主義の創始者」とされるが, 吉田はカンパーの本来の目的は人間の多様性を表現することであったことを示す。この点で吉田とウエストの見解は一致している。

のではない<sup>10)</sup>。例えばバリバルは、理論的レイシズムが分類から階層化、そして普遍化へと、段階を経ていくことを明らかにしている (Balibar 1991=1995: 83-84頁)。ウエストが明確にした内容で注目すべき点は、レイシズムが奴隷制を支えるイデオロギーとは別のところで生まれたものであるという点である。それどころか白人優越主義の萌芽は、差別や経済的な搾取を意図するものではなかった。レイシズムは黒人を奴隷や低賃金労働者とするために作られたのだから、経済的搾取の撤廃により差別を解消できると私たちは考えがちである。しかしウエストは、レイシズムが経済的意図という下部構造よりも、さらに深いところに根ざしていることを明らかにした。このためにアフリカンアメリカンを抑圧するレイシズムは解消されないどころか、ますます強化されたのである。

しかしここにはいくつか検討しなければならない課題が残る。第1に、ウエストは白人優越主義と近代レイシズムは、近代言説と科学の創造的融合によって、近代において発生したと考えている。彼によれば人種という概念は、古代ギリシア時代にはなかった。しかし、レイシズムの発端をギリシア・ローマ時代の地中海世界の文献に見ることは全く不可能なことではないだろう。そこでは人間の間に差異を見つけ出し (ただしそれは外見とは直接結びつかない)、他者化することが行われていた<sup>11)</sup>。前近代レイシズムに焦点を置いた研究と、近代レイシズムとの間に連続している面を考察することが、現在私たちが直面しているレイシズムの正体を明確にする上で必要になってくる。

第2に、こうして生まれた白人優越主義が、20~21世紀の間にどのように展開されたかを明らかにする必要がある。人種概念は地域や時代により変化する。また「ネオレイシズム」もしくは「文化的人種主義」に対する言及も、現在のレイシズムと向き合うために不可欠なものと言える。

## 2. 保守派・リベラル・リベラル左派のレイシズム論

ウエストはアフリカンアメリカンが経験する抑圧に関する保守派とリベラル派による見解を、著書の中で繰り返し批判的に扱っている。*Keeping Faith* (1993) に所収の論文“Race and Social Theory”では、リベラルからリベラル左派を分けて、保守派・リベラル・リベラル左派・マルクス理論のレイシズムの見解を扱っている。マルクス主義理論のレイシズムの見解については、*Prophetic Fragments* (1988) に所収の“Toward A Socialist Theory of Racism”においても取り上げられている。本節では保守派とリベラル、リベラル左派によるアフリカンアメリカンに対するレイシズムについての見解を検討し、節を改めてマルクス主義理論についても検討する。

まず保守派の社会理論では、アメリカにおける黒人差別を (1) 市場での差別と、(2) 人間の心の中で下された判断という2つの領域において分析する (KF: 252)。言い換えると、アフリカンアメリカンに対する差別を、白人雇用者や白人労働者の「嗜好 (すなわち好き嫌い)」の問題に還元する

10) 例えば、藤川, 2011, 49-60頁, Fredrickson, 2002 [2009]: 54-57頁。ただし、骨相学や観想術に関する記述はいずれの教科書にも言及されていない。

11) 例えば、アリストテレスは『政治学』の中でギリシア人の能力の高さを誇り、バルバロイの奴隷的本性を主張する (1252b-1254a)。ギリシア人とバルバロイとの間の結婚を避ける傾向はヘレニズム時代にも継続している。

のが保守派の見解である。代表的な例を挙げると、経済学者ミルトン・フリードマン<sup>12)</sup>や、その弟子であるゲーリー・ベッカー<sup>13)</sup>は、この立場から市場における差別を検討した。白人雇用者や労働者の「差別的嗜好」は、利益の最大化という市場原理から外れたものであり、いずれ競争市場によってこうした嗜好を持つ企業は自然に淘汰されるだろうと彼らは考えた (KF: 253)。

これに対して教育心理学者のアーサー・ジェンセンや心理学者のリチャード・ハーンスタインは、黒人のほうが遺伝的に知能が低いと主張した (KF: 253)。フリードマンやベッカーが白人雇用者や労働者の持つ「差別的嗜好」が合理的でないとしたのに対して、ジェンセンやハーンスタインはそうした「嗜好」に社会生物学的根拠があると言うのである<sup>14)</sup>。

このような「差別的嗜好」を社会生物学的に正当化する考え方とは別に、政治学者のエドワード・バンフィールドや経済学者のトーマス・ソーウェルは、このような「嗜好」を文化的に正当化することを試みる (KF: 254)。この見解を示す研究者たちは、アフリカンアメリカンにプロテスタント倫理—例えば勤勉さや忍耐、禁欲、粘り強さといった習慣—を再生するよう要求する (RM: 18 [32頁])。一言で言えば、アフリカンアメリカンが直面している問題は、アフリカンアメリカンの怠慢に原因があるという主張である。アフリカンアメリカンが白人に受け入れられるよう努力すれば、問題は解決するというのである。しかしこの見解をウエストは、アフリカンアメリカンを苦しめる「不道徳な」環境—低所得、高失業率、劣悪な住環境、不十分な教育—を押し付けられていること—への公的責任を無視しているとして批判する (RM: 6 [22頁])。

さらにウエストは、この保守的な見解の問題点をいくつか挙げて批判を展開している (KF: 254)。まずこうした議論は、白人雇用者や白人労働者が市場原理に従い行動するという考えに基づいたものである。しかし人間の行動が市場原理のみでは説明できないことは、もはや言うまでもない。またこうした市場原理主義は、ベンサム功利主義やホブスの自己保存の本能といった考え方を前提としている。さらにこうした考え方を支える新古典派経済学は、市場の制度や力関係には関心を示すが、社会的・歴史的構造に対しては全く関心を示さない。

次にリベラルな見解は、(1) 市場における差別をもたらす制度的障壁と、(2) アフリカンアメリカン文化に内包される欠点に焦点を置く (KF: 255)。リベラルの立場を取る経済学者のグンナー・ミュルダールやポール・サミュエルソンは、このアフリカンアメリカン労働者を差別する市場の制度的障壁を取り払うためには、雇用制度への国家の介入が不可欠であると主張した<sup>15)</sup>。またアフリカンアメリカン文化に固有の問題を取り払うために、政府はアフリカンアメリカンに対する職業教育プログラムを充実させるべきであるとも主張した。しかしウエストに言わせれば、このリベラル派の打ち出す政策はアフリカンアメリカンが直面する困難を経済的次元でのみ捉えようとするものであり、短絡的である (RM: 4-5 [20頁])。

12) フリードマンは『資本主義と自由』でレイシズムにまるまる1章分(7章)を割いている。

13) 彼はフリードマンの指導の下執筆した博士論文は、*The Economic of Discrimination* (1957)として出版された。

14) 社会生物学的な根拠を否定する研究については、川島2014: 20-21参照。

15) ミュルダールには*An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy* (1944)を出版している。これはカーネギー財団の委嘱によるアフリカンアメリカン問題に関する調査に基づいた著作である。

保守的な見解もリベラルな見解も一貫して、レイシズムを市場原理の中で起きることとしている。したがってアフリカンアメリカンが白人と平等に働けることを「おおよその正義」とする。そしてその正義の達成のためには、保守派もリベラル派も国家による雇用と教育への介入が必要であると主張する。

リベラル左派の社会理論は保守派やリベラル派とは異なり、明確な歴史的感覚を持ち、政治と経済の結びつきに敏感である（KF：256）。また新古典派経済学ではなく、構造機能社会学を援用してレイシズムを検討する。したがってリベラル左派は、アフリカンアメリカンに対する抑圧を絶えず変化させる歴史的現象として理解する。

リベラル左派はアフリカンアメリカンに対して変化を要求すると同時に、国家による市場への介入を主張する。これは保守的な社会理論とリベラルな社会理論との折衷的な立場とも取れる。しかしこの立場に立つ研究者は、アフリカンアメリカンの上のしかかる構造的・社会的重圧を理解し、この抑圧を名声や地位、資源を牛耳ろうと力を競う諸集団の観点から概念化しようと試みる。またリベラル左派にとって「収入」は、社会福祉の目安である。そこでアフリカンアメリカンの平均収入が白人の平均収入の60%に留まっている点を、雇用や公共事業、アフォーマティヴ・アクションによって改善するという政策を主唱した<sup>16)</sup>。

この保守派、リベラル派、リベラル左派の議論に対するウエストの最大の批判は、これら3つの見解が共通して、アフリカンアメリカンが「黒人であること自体へのニヒリズムの脅威」に直面していることを無視していることに対して向けられている（RM：19 [34頁]）。この脅威は、「ぞっとさせるような意味の喪失、希望の喪失、（そして最も重要な）愛の喪失の生活に直面している生活経験である」（RM：22-23 [37頁]）。大部分のアフリカンアメリカンが、今存在していることの意味を感じることができない、未来に希望を抱くことができない、そして自分のルーツに誇りを持つことができないという問題に直面している。これは政治経済的な問題ではなく、文化を超えた自尊心の問題である。このようにウエストのレイシズム論の要諦は、保守派とリベラル派（左派も含む）に対する批判にこそある。すなわち、レイシズムが「ニヒリズムの脅威」に根ざしており、アフリカンアメリカンを疎外する政治的制度や経済的貧困はその脅威の上に置かれているというまさにこの点が、ウエストのレイシズム論の中核である。

---

16) ウエストは、アフォーマティヴ・アクションが仮にアフリカンアメリカンの貧困を軽減できず、レイシズムを労働現場から取り去る力にならなかったとしても、これを60年代において「最善の可能な妥協であり、譲歩であった」（RM：95 [104頁]）と述べる。また、アフリカンアメリカンが貧困を取り除くためには、このアフォーマティヴ・アクションは「強化されなければならない再分配の連鎖の一部分である」（RM：96 [106頁]）とも言う。ただ、アフリカンアメリカンが立ち向かっていかなければならない「黒人の貧困」は「黒人的アイデンティティの問題（すなわち、アフリカンアメリカンが自らを愛し、自らを尊重することができること）とは併存している。このことをリベラルは忘れていたのである。

### 3. マルクス主義理論のレイシズム論

ウエストは、マルクス哲学をマルクス主義思想 (Marxist thought) とマルクス主義 (Marxism), マルクス主義理論 (Marxist theory) に区分し、マルクス主義理論のみを社会批判の方法論として認めている (KF: 258)。ウエストによるとマルクス主義思想は、歴史が向かっていく方向の予見を試みる歴史哲学であり、歴史の原因は1つしかなく、歴史に複数の流れを認めていないと批判する。またマルクス主義を、マルクス主義の名を借りた共産圏 (旧ソ連, 中国, キューバなど) の非民主主義的な支配体制であるとして批判する。しかし社会的・歴史的現実を明らかにする方法論としてマルクス主義理論を援用することは、アフリカンアメリカンの抑圧に顕著な特徴を理解するのに必須の要素である (KF: 258-9)。しかしウエストはこのマルクス主義理論をも批判の対象とし、いくつかの重要な問題点を指摘しているため、彼はこの方法論によりアフリカンアメリカンの社会的・歴史的現実を明らかにすることは究極的には不可能であると考えているのである<sup>17)</sup>。

ウエストの言うマルクス主義理論は、2つの出発点を持つ (KF: 259)。第1の出発点は、歴史的特殊性の原理である。この原理は通時的な見方を示す。これはアフリカンアメリカンに対する抑圧が生まれた社会的状況、絶えず変化し続けるアフリカンアメリカンに対する構造的抑圧、アフリカンアメリカンがつかんだり、つかみそこねたりした重要な転機 (1870年代, 1920年代, 1960年代) の3点を検証する。

例えば南北戦争後の再建期 (1870年代) の南部は、強力な労働運動が形成される転機にあったにもかかわらず、レイシズムがそのチャンスを反故にした。ウエストの論文の中に、このことを歴史的に説明したものがある (“Race and Class in Afro-American History” in PF: 94-96)。これによれば南北戦争以前の北部では、アフリカンアメリカン労働者はアイルランド人労働者にとって、自分たちの仕事を奪う集団であった。そして白人労働者は、アフリカンアメリカン労働者を「スト破り」要員と見なした。

また労働騎士団は当初、組合員の20%がアフリカンアメリカンであった。しかし南部の白人労働者の組織内での発言力が強くなるにつれて、騎士団はアフリカンアメリカンのアフリカ移送計画を支持するようになった。さらに後に結成されたAFLも、アフリカンアメリカン労働者を歓迎しなかった。そのためアフリカンアメリカン労働者は独自の組合を組織し、白人労働者と対立するようになった。

第2の出発点は、時代や場所を超えて行われた社会实践の重要性の原理である。この原理は共時的な見方を示す。下部構造 (例えば生産様式や統治機構, 社会階級) および上部構造 (例えば宗教, 思想, 芸術) は、集団や個人の社会行動を形成するだけでなく、歴史的潜在力や効果を持つと考えられる。古典的マルクス主義者は、下部構造が決定的要因・土台となって上部構造が構築されると考え

17) ローティはウエストやイーグルトンなど重要な社会思想家が「感傷的な理由」でマルクス主義者を名乗っており、彼らがポーランドやハンガリー、中国といった共産圏で抑圧された人たちの経験を無視していると批判する (Rorty, 1998 [2000]: 50頁)。しかし、ローティはウエストがマルクス理論を、旧共産国家のイデオロギーとしてのマルクス主義を厳密に分けようとしていることを無視している。

る。しかしネオマルクス主義者は、下部構造と上部構造は相互に限界を設定し、圧力を行使する関係にあると主張する。マルクス主義理論はレイシズムを、歴史的に状況づけられた行動する主体と、その主体がそう行動することを可能にしたり制限したりする物質的に基礎づけられた構造との間の多重の相互作用として分析する（KF：260）。

ウエストは常に進化する社会を、社会的実践<sup>18)</sup>によって「(複数の比較的自律的な領域が、ある程度時間をかけて)<sup>19)</sup> 複雑に複合した全体性」(complex articulated totality)として捉える（KF：260）。この「複雑に複合した全体性」において、社会の多様な階層間の葛藤が互いに複雑に絡み合っている。とはいうものの、1つの階層の特徴が他の階層の特徴と鏡像関係にあると同等されたり、そうした関係に還元されたりはしない。しかし経済や政治、文化といった様々な領域の内部や、そうした領域を横断してこれらの葛藤が複合して「全体性」が形成される。なぜならこうした葛藤が結びつくのは、偶然や気まぐれによってではないからである。マルクス主義理論はこうした葛藤の結びつきについて、社会経済的な説明が必要であると主張する（KF：261）。社会経済的説明は、人間社会内部の動態（共時的側面）と人間社会の歴史の変革（通時的側面）の決定的な要因として、経済領域が存在することを私たちに示す。このように考えると、マルクス主義理論はアフリカンアメリカンの抑圧の原因を白人の嗜好としたり、制度的障壁としたりするようなことはない。

これまでのマルクス主義によるアフリカンアメリカンに対する抑圧に関する見解は、ウエストにより概ね4つに分類されているが、いずれも平凡かつ薄っぺらいものであるとして切り捨てられている。第1の見解は「階級還元主義」と呼ばれるものである。これはレイシズムを労働者階級の搾取の一般的な範疇に包括してしまう見解である（PF：98；KF：261）。この立場を取る運動家は、白人労働者もアフリカンアメリカン労働者も同じ労働者であって、直面している問題（すなわち資本家による搾取）は同じであると主張した。しかしこの立場は、労働現場以外の日常生活の領域でのレイシズムを軽視している。

第2の見解は「階級・超・搾取」と呼ばれる立場である（KF：262）。すなわちアフリカンアメリカン労働者は、雇用差別や賃金の構造的不平等（昇任や昇給など）といった、労働現場における差別を受けていることを認める見解である。この立場はアフリカンアメリカンが、白人よりも多重の搾取を受けていることを認めている。しかし労働現場以外の日常生活における差別や偏見による弊害については認めていない。

第3の見解は「黒人民族論」と呼ばれる立場である（PF：98；KF：263）。これは黒人マルクス主義者の間で最大の影響力を持つ立場である。この立場はアフリカンアメリカンの受けている抑圧を、階級搾取と民族支配という観点から理解する。黒人民族論の見解を支持する人々は、アフリカンアメリカンをアメリカ社会において抑圧された少数民族と同等する。例えばアメリカ共産党のハリー・ヘイウッドは、その著書*Negro Liberation*（1948）の中で、「民族とは共通の言語、領土、経済的生活、

18) この社会的実践は、支配関係が複雑に交差することと、過剰に決定された経済領域と比較的自立した政治的・文化的・神学的・心理的領域における対立することである（KF：260）。

19) 丸括弧内の補足は論者による。「複雑に複合した全体性」はアルチュセールの用語を援用したものと考えられるので、そこから想定して補足した。

そして共通の文化に表された心理的性質に基づいた人民の、歴史的に構成された固定した集団である」というスターリンが、『マルクス主義と民族問題』（1913）において主張した民族の定義を、黒人地帯のアフリカンアメリカンは十分に備えていると主張した。言い換えれば、この「黒人民族論」とは、アフリカンアメリカンは自決権を持つ民族であると主張する立場である。しかしウエストは、この黒人民族論はマルクス・レーニン主義の間違った試みであり、そこには民族に関する歴史的考察を省略した定義、国境に関する正確さを欠いた統計的測定、黒人経済に関する幻想しか存在しないと批判する（KF：263-4）。

第4の見解は「階級レイシズム」と呼ばれる立場である（PF：99；KF：264）。この立場は、レイシズムの原因を階級搾取のみに還元する普遍的・単一的・歴史を超えた現象として捉えるそれまでのマルクス主義理論の見方を否定する。この立場を取る者は、レイシズムを階級関係を形成し、資本主義を通して個人の生における重要な側面を作り出す社会的実践が複雑に絡み合ったものとして理解する。この立場もまた、現代社会におけるレイシズムを説明するためには経済的側面からの説明が不可欠であると指摘する。この点にウエストは不満を抱いている。

マルクス主義理論の長所と短所を総括すると以下のようなになる（PF：99）。長所としては、歴史現象としてレイシズムを解明するために、マルクス主義理論は不可欠な役割を果たす。なぜならマルクス主義理論は人種差別的行為と生産の資本主義的様式との関係を明らかにし、レイシズムが資本主義経済の中で果たす役割を解明するからである。しかし他方で、マルクス主義理論にはレイシズムの経済以外の社会領域における意義を真剣に検討しないという決定的短所がある。またこの理論は、レイシズムを近代資本主義の産物と捉えるが、先述したとおりレイシズムは資本主義以前から萌芽していたことを看過している。

#### 4. ウエストのレイシズム論

ウエストのレイシズム論は、3節で述べたマルクス主義理論の批判的徹底の上に成り立つ。ウエストは自らの研究論を「系譜学的唯物論」と呼ぶ。これはマルクスやエンゲルスが確立した「史的唯物論」を、ニーチェやフーコーの系譜学により徹底することを意味している。またマルクス主義の言う多面的に構築された社会实践の唯物的性格を維持する（KF：265）。

歴史学は特定の視点を排除して歴史を見るものであり、歴史的な出来事の原因と結果を明らかにし、歴史的出来事を歴史の法則の中で必然的に起きたものであると考える。系譜学はそうした歴史学的前提を否定する。すなわち、出来事は何らかの目標を目指すものでも、何らかの法則に従うものでもなく、誰かの意図により動くものでもない。出来事を発生させる力は、偶然の結果である。そして系譜学的にそれぞれの思想家を批評することは、それぞれの思想家をいくつかの歴史的ファクターや思想のトレンドが複合して生成したものとして捉え、その生成の現場を明らかにしようとするのである。

このように系譜学によって唯物論を徹底させれば、特定の生産様式を説明する際に、経済領域を下部構造、すなわちあらゆる歴史的事象の基盤とする必要はない。なぜなら先述のとおりウエストは、

この社会を社会的実践によって「(複数の比較的自律的な領域が、ある程度時間をかけて)<sup>20)</sup> 複雑に複合した全体性」として見ているからである。したがって歴史的な事象の内容によっては、文化的、政治的、あるいは精神的領域に基盤を置いて発生したものと考えることも可能なのである。これらの領域は互いに複雑に絡み合っているため、社会経済的解明にあたって領域に優先順位をつける必要はない(KF: 266)。

このウエストの系譜学的唯物論的分析は、系譜学的検討、マイクロ制度分析、マクロ構造的アプローチの3つの領域に分類することができる。第1に系譜学的検討は、近代西洋文明の様々な時代を支配した白人優越主義のロジックの生成・成長・受容を取り上げる。この白人優越主義のロジックは、ユダヤ・キリスト教によるハムの物語(創世記9: 18-27)に関する解釈に見られるような、宗教的なレイシスト理論、社会生物学的な人種に関する学説に見られるような科学的なレイシスト理論、そして精神的性的レイシスト理論と結びついている。ウエストはこうした点を解明していく。第2にマイクロ制度分析とは、自己のイメージやアイデンティティが形成される過程、白人が自分とは異なる「他者」と出会った際の衝撃、白人が非白人文化に出会った際に、その文化様式や美しさの基準、感性、言語的ジェスチャーを見下す心理的メカニズムを検討することである。第3にマクロ構造的アプローチは、支配階級による搾取、国家による圧力、官僚的支配のあり方に焦点を置いた検討である。

ウエストはアフリカンアメリカンが現在経験しているレイシズムの基盤を「ニヒリズム」という言葉で表す。アフリカンアメリカンはアメリカにおいて、250年近く法的地位、社会的地位、公的価値を奪われ、経済的価値のみを付与され、これを搾取されて来た。そこで奪われてきたものは、アフリカンアメリカンの自己愛であり、自己を尊重する精神である。

アフリカンアメリカンの中にある「黒人であること自体へのニヒリズムの脅威」こそが、アフリカンアメリカンの抱える最大の問題である(RM: 19 [34頁])。これは「黒人のニグー化」(the niggerization of black people)と言い換えられる(HT: 50)。アメリカ社会において黒人は、存在の意味を奪われ、希望を奪われ、黒人である自分を愛すること、黒人同胞間で互いに愛し合うことができなくなってしまった状態に陥っている。この状態こそが自己嫌悪、自己喪失、自傷、自責、自殺をアフリカンアメリカンの日常としてしまっている。ウエストによれば、アフリカンアメリカンの貧困の問題を考える際、経済面での実質的進歩にも、黒人の人間性の表明が不可欠である<sup>21)</sup>。

ジェンダーや階級の問題が、このニヒリズムの問題に複雑に絡まっている(HT: 51)。まずジェンダーの問題については、白人はアフリカンアメリカン男性をマッチョと決めつけ、アフリカンアメリカン男性側も、そのステレオタイプな期待に応えるように振る舞う。そして人種については「白さ」が基準となるように、ジェンダーについては異性愛が基準となると考えるようになる。こうした考え方に対して、アフリカンアメリカンが人種については「白さ」を、ジェンダーについては異性愛を基準とする考え方を放棄することが、アフリカンアメリカンの解放にとって重要である(HT: 54)。

20) 丸括弧内の補足は論者による。「複雑に複合した全体性」はアルチュセールの用語を援用したものと考えられるので、そこから想定して補足した。

21) 「もし黒人の貧困の除去が、黒人の実質的進歩の必要条件であるとするなら、黒人の人間性表明は、とくに黒人自身において、そのような進歩の十分条件である。」(RM: 97 [106頁])

次に階級の問題について。アフリカンアメリカンたちの間には、もともと強い同胞意識があった。しかし白人レイシストが肌の色の薄い者に対して肌の色の濃い者よりも多くのチャンスを与えることによって、アフリカンアメリカンの間に分断を持ち込んだ（HT：54）。そしてチャンスをつかんだ黒人上流・中流層は、アフリカンアメリカンのアンダークラスを怠け者、勤勉さに欠けだらしなというレッテルを貼り、軽蔑するようになった。このようにしてウエストの言う「ニヒリズム」は、アフリカンアメリカン全体に浸透していった。本来持っていた黒人愛に基づく同胞意識（すなわち黒人である自分をそのまま愛し、アフリカンアメリカンが互いに尊重し合うこと）の回復が必要とされている。

ウエストが「人種問題においては民主主義が問題となる」（RM：XV-XVI [7-8頁]）と言い切るのには、上述のようにジェンダーと階級がアフリカンアメリカン社会を超えた、アメリカ社会全体における問題だからである。民主主義は市場文化により、グローバルレベルで危機に直面している。だからこそアフリカンアメリカンがレイシズムの危機に直面している時に、それをアフリカンアメリカンのみの問題に限定してはならない。それは同時に、アメリカの民主主義が危機に瀕しているということなのである。

## まとめ

これまでの考察で明らかになった点は以下のとおりである。

1. 白人優越主義は、人間を亜種に分類する博物学的試みに端を発する。その試みに差別的な意図はなかったものの、分類された人種に優劣をつける考え方が生まれた。近代レイシズムはこのようにして創発したとウエストは主張する。これにより彼は、白人優越主義が奴隷制や経済的搾取を目的として形成されたのではなく、そもそも差別的意図のないところから発生したことを明らかにした。
2. ウエストは保守派・リベラル派・リベラル左派のレイシズム論が、いずれも共通してレイシズムを市場経済と結びつけて考えるあまり、アフリカンアメリカンが黒人であることにニヒリズムを感じている状況を無視していると非難する。差別撤廃のための運動は、被差別者の雇用機会の回復や地域の改善、社会福祉に留まることなく、被差別者がニヒリズムを克服し、自身の人間性を主張するようになる「精神的回心」にまで発展しなければならない。
3. ネオマルクス主義者を自認するウエストは、マルクス主義理論のレイシズム論にも満足しない。確かにマルクス主義理論は、レイシズムの歴史的側面を明らかにし、レイシズムと資本主義的生産様式との関係を明らかにした。しかしマルクス主義理論は、レイシズムが経済領域以外の社会領域（例えば社会政治や社会文化）において持つ意味を軽視している。社会を下部構造・上部構造に分けて理解する古典的なマルクス主義の見方から、社会を「複雑に複合した全体性」として捉える見方へ移行すること、そして系譜学唯物論的に社会の歴史的变化を捉えることが、被差別者の解放の思想に不可欠である。

## 引用文献

### コーネル・ウエスト主要文献

- 1977-1978, "Philosophy and the Afro-American Experience," *Philosophical Forum* 9: 117-148.
- 1982, *Prophesy Deliverance!: An Afro-American Revolutionary Christianity*, Philadelphia: Westminster. [PD]
- 1988, *Prophetic Fragments: Illuminations of the Crisis in American Religion and Culture*, Grand Rapids: Eerdmans. [PF]
- 1989, *The American Evasion of Philosophy*, Madison: The University of Wisconsin Press. (= 2014, 村山淳彦他訳『哲学を回避するアメリカ知識人 プラグマティズムの系譜』未来社) [AE]
- 1991, *The Ethical Dimensions of Marxist Thought*, New York: Monthly Review Press. [ED]
- 1993, *Keeping Faith: Philosophy and Race in America*, New York: Routledge. [KF]
- 1993, *Race Matters*, Boston: Beacon. (= 2008, 山下慶親訳『人種の問題 アメリカ民主主義の危機と再生』新教出版社。) [RM]
- 1996, *The Future of Race*, New York: A. A. Knopf (with Henry Louis Gates, Jr.). [FR]
- 1999, *The Cornel West Reader*, New York: Basic Civitas Books. [Reader]
- 2004, *Democracy Matters: Winning the Fight against Imperialism*, New York: Penguin. (= 2014, 越智博美他訳『民主主義の問題：帝国主義との闘いに勝つこと』法政大学出版局。) [DM]
- 2008a, 「キング博士の生涯とその遺産」『福音と世界』63(10)：15-19. ※2007年2月2日にブラウン大学で行われたMartin Luther King Jr. Lectureの『福音と世界』編集部による訳 [福音と世界]
- 2008b, *Hope on a Tightrope*, Carlsbad: Smiley. [HT]
- 2012, with Tavis Smiley, *The Rich and the Rest of Us: A Poverty Manifest*, New York: Smiley Books.
- 2014, with Christa Buschendorf, *Black Prophetic Fire*, New York: Beacon. [BP]

### その他の引用文献

- 今橋大輝, 2014, 「古典主義美学の誕生：ヴィンケルマンの美学に対する批判的検討」『法政大学大学院紀要』73：1-34.
- 大宮有博, 2009, 「レイシズム」関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『キリスト教平和学事典』教文館, 388-389.
- 岡崎勝世, 2006, 「リンネの人間論 ホモ・サピエンスと穴居人 (ホモ・トログロデュッテス)」『埼玉大学紀要 教養学部』41(2)：1-63.
- 川島正樹, 2014, 『アフォーメティブ・アクションの行方 過去と未来に向き合うアメリカ』名古屋大学出版会.
- 藤川隆男, 2011, 『人種差別の世界史 白人性とは何か?』刀水書房.
- 弓削尚子, 2012, 『『コーカソイド』概念の誕生 ドイツ啓蒙期におけるブルーメンバッハの『人種』とジェンダー』『お茶の水史学』55：1-32.
- 吉田耕太郎, 2001, 「多様性と序列 18世紀の人類学者ペトルス・カンパーをめぐる民族的区分 distinction の言説の諸相」『Quadrante』3：251-260.
- Balibar, Etienne, and Immanuel Wallerstein, *Race Nation*, 1991, *Class: Ambiguous Identities*, New York: Verso. (= 1995, 若林章孝他訳『人種・国民・階級 揺らぐアイデンティティ』大村書店.)
- Fredrickson, George M., 2002, *Racism: A Short History*, Princeton: Princeton University Press. (= 2009, 李孝徳訳『人種主義の歴史』みすず書房.)
- Freedman, Milton, 1962, *Capitalism and Freedom*, Chicago: University of Chicago Press. (= 2008, 村井章子訳

『資本主義と自由』日経BP.)

Memmi, Albert, 1994, *Le racism*, Paris: Gallimard. (= 1996, 菊池昌実・白井成雄訳『人種差別』法政大学出版局.)

Rorty, Richard, 1998, *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America*, Cambridge: Harvard University Press. (= 2000, 小澤照彦訳『アメリカ 未完のプロジェクト—20世紀アメリカにおける左翼思想』晃洋書房.)